Osaka University Knowledge Archive

Title	転換を表すNハサテオキの成立過程 : 中古から近世前期までを対象に
Author(s)	清田, 朗裕
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 110-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90793
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

転換を表すNハサテオキの成立過程

――中古から近世前期までを対象に――

清田朗裕

一　はじめに

本稿の目的は、初出例が確認できる中古から近世前期までを対象とし、Nハサテオキという転換を表す慣用表現の成立過程を歴史的観点から検討することである。[1] 本稿では、Nハサテオキという形式が転換の接続表現となる過程を捉えたいため、形式的特徴の変化にも着目する。

Nハサテオキは、転換のサテやトコロデと置換可能である。

（一）先日、先生のご著書の書評を○○新聞で見かけました。ご好評とのこと、心からお慶び申し上げます。さて／ところで／それはさておき、先日お願いいたしました原稿、締切を1ヶ月ほど過ぎているのですが、まだ弊社には届いていないようです。

（石黒二〇一六：一一一。一部改変）

このように、Nハサテオキはサテと置換可能である。その点において、転換の接続表現といってよい。しかし一方で、次例のようにサテと置換しにくい例もある。

（二）腰痛は甘く見てはいけない。かくいう私も以前、腰痛が悪化して半年も休職するはめになったことがある。?さて／それはさておき、腰痛になりやすい人のタイプを挙げてみよう。

（石黒二〇一六：一一一。一部改変）

この例ではサテは据わりが悪い。つまり、サテとNハサテオキとの間には機能差が認められるということである。しかし、このような機能差について、特に歴史的な観点から取り上げられたことは少ないように思われる。そこで本稿では、中古から近世までのNハサテオキの様相を取り上げる。特に、調査を進める中で特徴的だった説経におけるコレハサテオキという形式の使用状況を検討することで、転換についてより深く探っていくための一助としたい。

二　現代語のNハサテオキ

本節では、現代語のNハサテオキに関する先行研究の記述から、その形式的特徴、機能的特徴を整理する。

まず、石黒（二〇一六）では、ソレハサテオキという形式で、〈転換〉の接続表現の一つとして挙げられている。

（三）腰痛は甘く見てはいけない。かくいう私も以前、腰痛が悪化して半年も休職するはめになったことがある。それはさておき／それはそうと／それはともかく／それはそれとして／閑話休題、腰痛になりやすい人のタイプを挙げてみよう。

（石黒二〇一六：一一一）

石黒（二〇一六）によれば、転換のサテは〈関連する別の話題に移る〉ことを表し、ソレハサテオキはサテとほぼ同じ用法だが、ソレハソウト等と共に〈話を本筋に戻す〉ところに特徴があるとする。ここから、直前の話題は、本筋から少し外れた内容であることが窺える。

次に、小池他（二〇〇二）では、トモカク・トモカクトシテ・トニカク等と並び、除外表現の一つとして例が挙げられている（小池清治執筆）。

（四）英語は　さて置き、外国語は　全然駄目です。

（小池他二〇〇二：一九九）

この例では、「英語は」が除外対象、「さて置き」が除外動詞、「外国語は」が考慮対象、「全然駄目です」が考慮結果、とされている。ただしこの例は、転換の接続表現というより、対比関係を結ぶ表現と考えられる。小池（二〇〇二）では「さて置き」の形式は書き言葉的でやや堅い言い方であること、一方「さて置いて」の形式は話し言葉で用いられることが指摘されている。なお、小池他（二〇〇二）は、サテオキを動詞相当のものとして扱っているが、サテオクという終止形で文終止しにくいことや、アスペクト形式やモダリティ形式と共起しにくいことから、本稿では「Nハサテオキ（サテオイテ）」という形式で慣用表現化していると考える。

（五）a.?昨日の失敗のことはさて置く。今日からまた頑張ろう。（文終止）

b.??昨日の失敗のことはさて置いている。今日からまた頑張ろう。（アスペクト）

c.?昨日の失敗のことはさて置くそうだ。今日からまた頑張ろう。（モダリティ）

d　昨日の失敗のことはさて置き、今日からまた頑張ろう。

e　昨日の失敗のことはさて置いて、今日からまた頑張ろう。

なお、「現代書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）で「サテオク（語彙素読み）」と、「サテ（語彙素読み）」「オク（後方共起1・語彙素読み）」で検索すると、全体で四〇〇例程度確認できる。その中で、サテオクの形式で文を終止する例が一例、サテオキナガラが一例、サテオクトシテ（モ）の例が八例、サテオコウの例が一例みられた。それ以外は、サテオキ及びサテオイテの例に限られ

ていた。このような量的データから、本稿では、現代語において、Nハサテオキ（サテオイテ）という形式で慣用表現化していると考える。

以上、本節では、現代ではNハサテオキ（Nハサテオイテ）という形式で用いられ、転換の機能をもつことが指摘されていることを確認した。

三　先行研究

本節では、サテについての先行研究を整理し、転換機能について確認する。

三・一　転換について

転換とは、大きくは「話題を転じること」と規定できるが、論者によって様々に細分化されている。

田中（一九八四）は、「転換の接続」を以下の二つに分類する。

（六）aトニカク・トモカク等：それまでの話に、いったんしめくくりをつけて、新しい話題に移るときに用いられるもの
bサテ・トキニ等：まったく別の話を切り出したり、新たな話題をもち出すときに用いるもの
（田中一九八四：一一八－一一九参照）

市川（一九七八）は、転換の接続詞を以下の四つに分類する。

（七）転換――前の内容から転じて、別個の内容を導く。
〔転移〕＝ところで・ときに。〔課題〕＝さて。
〔区分〕＝それでは・では。〔放任〕＝ともあれ。
（市川一九七八：六六）

石黒（二〇一六）は、「転換の接続詞」として整理し、以下の三つに分類する。

（八）a移行の接続詞：先行文脈で述べた話題とは別の話題に切り替わることを予告する
b本題の接続詞：話題の転換はあるが、先行文脈の話題と後続文脈の話題に軽重があることを示す
c回帰の接続詞：ふと我に返るような話題の転換を予告する
（石黒二〇一六：一〇九参照）

論者によってその分類は異なるものの、転換の様相は複雑であることが指摘できる。本稿でも、転換の機能は細分化できるという立場を取り、Nハサテオキという形式の特徴を考えていく。

三・二　サテについて

サテは、指示副詞サと接続助詞テから構成される。本節では、指示副詞サを中心に考察した岡﨑（二〇一一）、百瀬（二〇一九）を取り上げ、接続詞サテがどのように捉えられているのか整理する。

岡﨑（二〇一一）は、サテとカクテを指示性の有無や前後の文脈関係を踏まえ、AからEの五段階に分類した。その中で特に接続語として認定されたのは、B・C・Dの場合である。

（九）B：X。サテ【（条件・原因等）・継起】、Y。
C・D：X。サテ【添加・話題の転換等】、Y。

（岡崎二〇一一：七四－七五を参照し作成。）

Bは、継起を表す接続語として用いられており、転換とは異なるとする。そして、C・Dについては、Cが言語的文脈で表される事態に対して添加・転換を果たすものとされるのに対し、Dは現場の状況等に基づく事態に対し、添加・転換を果たすものとして区別しつつも、C・Dが転換の接続語と考えられている。

百瀬（二〇一九）は、西田（二〇〇一）と岡崎（二〇一一）とで転換の用法に対する認識の違いがあることを指摘したうえで、サテの使用状況について、文頭・文中の違い、地の文・非地の文（対話文・心内話文・消息文）の違いに注目し、その使用頻度を整理し、接続語化に向かう流れを明らかにしている。

四　問題点

本節では、先行研究を踏まえ、問題点を指摘する。

前節で示したように、転換という機能は、下位分類できると考えられる。しかし、従来、指示詞由来の接続語サテの先行研究では、指示語か接続語か、添加か転換か、という観点からの考察が中心であり、転換の内実をさらに考究するものは少なかったように思われる。岡崎（二〇一一）、百瀬（二〇一九）等が、カクテという形式も転換を表すことがあったことを指摘しているが、転換という大枠で整理されているため、カクテはサテと併用されていた時代があるという指摘に留まっており、その機能差の有無は明らかでない。つまり、サテとカクテが置換可能な部分とそうでない部分が何なのか、検討しにくいということである。

それでは、その機能の差はどこに求められるのだろうか。これは、転換という機能を細分化していくことによって明らかになると思われる。

そこで本稿では、以上の問題点を基に、サテを含むNハサテオキという形式を取り上げ、サテとの機能差を考えたい。Nハサテオキという形式を取り上げるのは、サテを含む形式であることから、サテと共通する側面と相違する側面の両方が確認できることが期待されるからである。特に相違する側面を、Nハサテオキの特徴の一つとして捉えることができる。

五　調査方法・調査対象

調査方法は、以下の通りである。

Nハサテオキは、サテに比べて使用頻度が低い形式であることが予想される。そのため、多くの資料を用い、広く用例を収集するため、コーパス資料を活用する。ただし、説経に見られる例が特徴的であったので、非コーパス資料としてそれも取り上げる。収集した用例は、文頭か文中か、中止か終止かといった文中の位置で整理する（表一）。また、転換の内実をより詳細に取り上げるため、Nハサテオキの前後で（一）登場人物（主語）の変化、（二）時間の変化（ただし、通常、時系列に沿って話が展開するため、ここでいう変化とは、前段と断絶した過去・現在・未来の時間の変化を指す）、（三）場所の変化、（四）話題の変化、の有無を整理し、

サテとの機能差について考察する（表二）。

結論を一部先取りすると、Ｎハサテオキはサテと同様の機能を持つと考えられるが、説経にみられるコレハサテオキという形式を検討すると、（一）～（四）のうち、複数の変化が認められる場合にのみ用いられており、使用制限があるという特徴が認められた。まさに〈場面〉の転換を表すにふさわしいマーカーとして使用されていることが明らかになった。

次に、調査対象は中古から近世前期とする。[2] コーパス化された資料として、日本語歴史コーパス（ＣＨＪ）、日本古典文学大系データベース、Japanknowledge の検索機能を活用する。非コーパス化資料として、中世から近世前期にかけての説経、特に本稿では「山椒大夫」の諸本を取り上げる。また、西行『山家集』にも一例確認できたため、取り上げる（二十一）。

六　調査結果

本節では、調査結果を時代毎に述べる。

まず、Ｎハサテオキに関連する用例の量的分布を表一に示す。

表一　サテオキに関する用例の量的分布

	地の文			非地の文			計
	文頭	文中	文末	文頭	文中	文末	
中古					1		1
中世前期		1	4			3	8
中世後期	1		1		2		4
近世前期		1				2	3
説経4作品	2		18				20
計	7	2	19	5	3	0	36
	28			8			

次に、サテオキの前後で主語・時間・場所・話題の変化がみられた場合の組み合わせを表二に示す。組み合わせは以下の通りである。Ｐは動詞の語彙的意味を保つものであるため別立てする。

（十）Ａ：主語のみ、Ｂ：時間のみ、Ｃ：場所のみ、Ｄ：話題のみ、Ｅ：主語・時間、Ｆ：主語・場所、Ｇ：主語・話題、Ｈ：主語・時間・場所、Ｉ：主語・時間・話題、Ｊ：主語・場所・話題、Ｋ：時間・場所、Ｌ：時間・話題、Ｍ：時間・場所・話題、Ｎ：場所・話題、Ｏ：主語・時間・場所・話題、Ｐ：〈そのままの状態に留める〉意

表二　主語・時間・場所・話題の変化の組み合わせ毎の量的分布

	中古	中世前期	中世後期	近世前期	説経4作品	計
A	0	4	2	3	0	9
B	0	0	0	0	0	0
C	0	0	0	0	0	0
D	0	0	0	0	0	0
E	0	0	0	0	1	1
F	0	1	1	1	2	4
G	0	0	0	0	0	0
H	0	0	0	0	1	1
I	0	0	0	0	5	5
J	0	0	0	0	0	0
K	0	0	0	0	0	0
L	0	0	0	0	0	0
M	0	0	0	0	0	0
N	0	0	0	0	0	0
O	0	1	0	0	11	12
P	1	2	1	0	0	4
計	1	8	4	3	20	36

六・一　中古

中古では、『源氏物語』に一例みられるのみであった。接続助詞テを伴い、NヲサテオキテとNヲサテオキテという形であった。

（十一）見るからに、御心騒ぎのいとどまされば、言少なにて、聖だつといひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人をさておきて、心のどかに月日を待ちわびさすらむよ、と思す。

（『源氏物語⑥』浮舟：一三九－一四〇）

匂宮が「（薫が）浮舟を放っておくこと」を心中で表す際に「サテオキ」が用いられている。Nは「浮舟」を表し、サテは観念用法の例と考えられ、転換の接続表現としては用いられていない。

もちろん、サテ単独や、オク単独の用例は数多くみられるため、各語が用いられていなかったわけではない。サテオクという形式ではまだ十分結びついていないということである。

六・二　中世

中世では、複数の用例がみられるようになる。

特に中世前期では、以下に挙げるように、連体修飾節や文末で用いられる例が見られる。

（十二）而る間、其の人の妻形端正にして心あて也ければ、男限なく相ひ思て棲ける程に、其の妻世の中の心地を重く煩ひて、日来を経るに、夫心を尽して嘆き悲びて、様々に祈請ずと云へども、遂に失せにけり。其の後、夫限なく思ふと云へども、然て置たるべき事に非ねば、棺に入て、葬の日の未だ遠かりければ、十日余家に置たるに、夫此の死たる妻の限なく恋しく思えければ、思ひ煩ひて、棺を開て望けるに、長かりし髪は抜け落ち、枕上にをぼとれて有り、愛敬付たりし目は木の節の抜跡の様にて空に成れり。

（『今昔物語集②』巻第十九・第十：四八九）

（十三）今一人の修行者、「我をも引落して彼等が様に打むずらむ」と思ふに、悲ければ、憑奉る本尊に、「我を助給へ」と心の内に念ずる事限なし。其の時に主の僧、「其の修行者をば暫く然て置たれ」と云て、「其に有れ」と云つる所に居たる程に、日も暮ぬ。

（『今昔物語集④』巻第三十一・第十四：五二五）

（十四）八郎、これを聞きて、色を失ひ、音もせず。その外の子供は、「かやうに付き副ひ奉るも、我等が身の上はさておきぬ、ただ心苦しさにこそ候へ。ともかくも、御身の助から

せたまはん事こそよく候はめ。ただ御意にこそ」

（『保元物語』中：三三三）

（十五）凡夫なれば、おのづから失あらむことを疑ふべきなり。かねてまた、人倫の事はさておきつ。神祇を侮り、なきがしろにせし漢家の国王、帝運久しからず。

（『十訓抄』第三・十六：一四五）

（十六）これは、かの僧のすすめることにはあらず、天魔の所為なれども、愚かなるよりおこれるうへ、さきのことにあひ似たるあひだ、しるす。これらはさておきつ。しかるべき人の習ひとして、心をはかり見むために、なにごとをもあらはに見せ知らせず、心をまはして、つくりも出し、いひもせられたらむを、よくよく案じめぐらして、不覚せぬやうに振舞ふべし。

（『十訓抄』第七・二：二八八）

（十七）僧徒の勤めには、八宗の修学、一陀羅尼行者、法華持者等なり。おほむね、後世の修因なりといへども、公請におもむく日は、今生の能ともいふべし。天竺、震旦はさておきつ。わが朝にとりても、弘法、伝教、慈覚、智証の四大師をはじめ奉りて、菩薩、和尚号をかうぶらるるたぐひ、聖人、権者の名をあらはす振舞、その証多かれども、面々の霊験、行徳、さのみしるしがたし。

（『十訓抄』第十・五十七：四五〇）

（十八）夜もすがら眺めてだにも慰まん明けて見るべき人の影かは　と独りかこちて居たりける。これはさておき、十郎は宿所へ帰り、虎が姿の忘られず泣き居たるところに、五郎、早川の伯母の許より来たりつつ、

（『曽我物語』巻第六：二三〇）

（十二）「然て置たるべき事」のように連体修飾節をつくるものや、（十三）～（十七）のように文末にくる例がみられる。なお、（十二）・（十三）は、〈そのままの状態にしておく〉と解釈できる。（十五）～（十七）は、それぞれ「人倫」と「神祇」、「さきのこと（前話）」と「今の話」、「天竺、震旦」と「本朝」という対等な関係が対比されていると考えられる。（十六）では、「これら」という指示語が見られるが、転換の接続表現とはいえない。転換の接続表現の可能性があるのは、（十八）のコレハサテオキの例である。遊女の「虎」を「そこにそのまま置いておく」と解釈するなら、転換の接続表現とは言えないが、コレハサテオキの後は、十郎は場所を移動し、虎を思い出し泣いているという場面が始まるため、場面が転換したと見ることも可能である[3]。なお、『山家集』にもサテオキテが用いられている。

（十九）崇徳院に百首歌奉りける時、恋歌　皇太后宮大夫俊成　思ひわび見し面影はさておきて恋せざりけん折ぞ恋しき

（『新古今和歌集』巻第十五・恋歌五・一三九四：四〇三）

（二十）薬師の十二の誓願は　衆病悉除ぞ頼もしき
一経其耳にはさて措きつ　皆令満足すぐれたり

（『梁塵秘抄』巻二・三一：一九二）

（二十一）雲取や志古の山路はさておきて小口が原のさびしからぬか

（『山家集』下・雑・九七七：二七三）

（十九）では、接続助詞テと共起し、〈Nはそのままにしておいて〉の意を表す。サテも直前の「思ひわび見し面影」を指示する。（二十）は、『古今著聞集』（巻第六）にも引用されているもので、「さて措きつ」と完了のツを伴って終止している。[4]（二十一）は、「雲取や志古の山路」が寂しいかどうかはおいておき、小口が原が寂しくないことがあるだろうか、という対比関係を読み取れる。

中世後期になると、Nハサテオキの形式をとる例が増加する。

（二十二）北方御車より下り玉ひて、涙の中に御覧ずれば、一間なる所の蜘蛛手緊しく結ひたる中に、御身を縮めて、起居も快からず。流るる御涙袖に余り、御身も浮くばかりなりしかば、御咎の事はさておきぬ。まづ時に当たつて、見る物は皆涙をぞ流しける。

（『太平記②』巻第十三：一〇九）

（二十三）『地獄のあるじえんま王、〳〵、ろさひにいざやいでふよ』「是は、ぢごくのあるじえんま大王にて候が、そうじて人間が利根になつて、八宗九宗はさておき、けんがくのほうをたて、色々さま〳〵のしうていをこしらへて、極楽へぞろり〳〵と、案内なしにとをるによつて、地ごくのがしんもつてのほかな

（『虎明本狂言集翻刻註解〈上〉』餌差：四七四）

（二十四）「最前は都迄御供いたさうとやくそくを致たれ共、爰元でつれを待合するはづじや程に、そなたはさきへおのぼりやれ「是はいかな事、出家沙門の一たびかたひ約束をいたひて、互に用が有とも待合せて、同道いたさうと申た程に、そなたがおまちやらば、身どもも待まらせう「近比かたじけなひ、さりながら、一日や二日ならばまつても下されひと申さうが、五日手間がいらふやら、あるひは十日手間がいらふやらしらぬ程に、そなたはさきへおのぼりやれ「五日十日の事はさておひて、五年なり共、十年成共待まらせう

（『虎明本狂言集翻刻注解〈下〉』宗論：二五六）

（二十五）明神も楽天にまけじと思召、日本には哥をよふでなぐさむとて、哥をよみ給ひければ、楽天きもをつぶし、日本にはあひていのいやしき者も哥をよむと、ふしんを申せば、明神我等ごときの者は扨おき、水にすむ蛙までも哥をよむと仰られた

（『虎明本狂言集翻刻注解〈下〉』白楽天：四六三）

（二十二）は、「御咎の事」は今は考慮せず、皆涙を流したという例である。サテオキヌの形で文末で用いられている。場面としては連続している。（二十三）～（二十五）で挙げた『虎明本狂言』の例は、文中でも文頭でも用いられている。

六・三　近世前期

近世前期には次のような例が見られる。

（二十六）帰れなら帰れですむ帰ればあづまが首尾よいとは、さうしたあづまぢやないわいなかはいい男の流浪したのを聞きながら身の首尾を思ふやうな傾城ぢやと思うてくだんすは曲がない、情けない。くつわの訳が立たぬとて二度廓へ立ち帰り、身の恥はさておいて勝二郎様の恥辱はこれが何と雪がれう

（『近松門左衛門集①』淀鯉出世滝徳：八〇）

（二十七）イヤ、半七は昨日から頭痛するとて、鉢巻で小座敷に寝てゐまするなんぢや、頭痛ぢや若い身で、またしては頭痛の、痞のなんのとは、みな茶屋酒が過ぎるから粥でも炊いて食はしたかァイ粥のことはさておき、重湯も喉へ通らぬと言うてやう〳〵と今、朝酒の燗して飲んでみてどうでも色のない酒は飲まれぬと苦い顔しながら、中椀にたつた三杯

（『近松門左衛門集①』長町女腹切：四四七）

（二十六）・（二十七）も対比関係を読み取ることができる例である。「身の恥」や「粥のこと」を取り上げていることから、前段全体を対象としているわけではないことが分かる。

ではここで、近世前期で特に顕著な使用例が確認できた説経を取り上げる。本稿では、「山椒大夫」を取り上げる。「山椒大夫」は中世末（推定）から近世前期にかけて複数あり、それぞれの違いを検討しやすいため、その使用実態を示しつつ述べたい。次のような例である。

（二十八）［みたい所の話題］これはみたいの御物かたり、さておき申、ことにあはれをとゞめたは、さてみやさきの三郎か、きやうたいの人々を、二くわん五百にかいとつて、あとよさきよとうるほとに、

（「さんせう太夫」（與七郎正本）：六）

（二十九）［づしわう丸の話題］これはつしわう殿の物かたり、さてをき申、花のみやこにおはします、三十六人のしんか大しんの御なかに、むめずのゐんと申は、なんしにもによしにも、すゑのよつきが御さなふて、

（「さんせう太夫」（與七郎正本）：二四）

（三十）それおやこ兄弟のわりなき事は。さうかひよりもふかし。爰におふしう五十四くんのあるじをは。いわきの判官まさうぢ殿とぞ申ける。▲さる間正うぢ。みかどの御かんきかうむり。つくしあんらくしに。る人とこそは聞へける。是は扨をき爰に又。しのぶのこほりにおはします。みだい所やきんだちにて。しよしのあはれをとゞめたり。

（「さんせう太夫」（寛文七年板）：四六）

（三十一）第二　兄弟なけき幷いせのこはきなさけの事

是は扨置みやさきの三郎は。あたひがまさはうらんとて。かなたこなたとうる程に。卅五てうと申には。たんごの國ゆらのみなと。さんせう大夫がもとに。しろをつもつて十

七貫文にうりけるは。しよしのあはれと聞へける。太夫なのめによろこび。扨なんぢらが□□□何と申ぞ。

（「さんせう太夫」（寛文七年板）：五〇。□は読み得ない箇所）

（三十二）へいたわしや。わか君（＝厨子王丸）は、御前をまかり立。とある所に立よりて。くときことこそあわれなれ。三かのしばさへ、ゑこらぬに。そもや十かこれとは、何となるへきかなしやと。まつさめ〳〵とぞなき給ふ。おつる泪のひまよりも。けにまことわすれたり。あのこのむかいに（あねこカ）参らんと。濱ぢを指（二重）てそ、へ下らるゝ。是はさておき。姉うゑは。濱ちの方にて、うしほをくんでましますか。つしわう丸は、ごらんして。

（「山庄太輔」（正徳三年板）：七六－七七）

（三十三）太ゆふ此よしを見るよりも、いかに三郎。もはやかやうに、けかれたるやつはらを。三の木戸はむやく。これより濱ぢゑつれゆき。松のきふねのその中に、おしこめておけとあれは。かしこまつて候と、兄弟を引立。はまぢにいそき、松の木ふねをひきおこし。その中におしこめおきけるは。しよじの。あわれと見（二重）えにけり、へ是はさておき。太夫か五人の子ともその中に。次郎殿、つね〳〵大じひの人なれは。我はんをすこしわけ。ぶも兄弟の目を忍び。よな〳〵濱ちにかよひ。兄弟のもの共を、はこくみ給ふ、こゝろさし。後の世までも、わすれ。かたなふ聞こえけり。

（「山庄太輔」（正徳三年板）：八〇）

（二十八）・（二十九）のように、より古態を残す「さんせう太夫」（與七郎正本）では、サテオキ申、という表現が文末で用いられている。これは、中世後期までの様相を保っていると考えられるものである。ところが、（三十）・（三十一）の「さんせう太夫」（寛文七年板）になると、コレハサテオキの例が見られるようになる。文末で用いられる例はなく、文頭でのみ見られる。さらに、（三十二）・（三十三）の「山庄太輔」（正徳三年板）も、文頭にのみ、コレハサテオキの例がみられるようになる。

そして、コレハサテオキの使用場面をみると、段の始めに用いられたり（（三十一））、直前に語り手の調子を高くする指示が見られるものがある（（三十二）・（三十三））。これらの例には、中世後期までにもみられた同一場面における対等な対比関係は認められず、主体となる登場人物が交替しており、また、時間・場所もコレハサテオキの前後で異なっている。まさに場面が転換していると考えられるものである。

七　考察

本節ではNハサテオキの成立過程を考察する。

まず、時代毎に整理すると、はじめに中古では、サテオキは一例のみ確認できた。サテは前文の内容を指示しているため、転換の接続表現の例ではないと考えられる。次に中世に入ると、文末用法の例が見られるようになる。ただし、ツ・ヌ・タリといったアスペクト形式を伴い、結果状態を表す例が複数見られた。その

ため、この時点では、文や話題を一旦区切ること自体に焦点があると考えられる。したがって、直接的に段落や場面の転換を表すわけではないと考えられる。とはいえ、話題を一旦区切るということは、その後に、新しい異なる話題が始まることを予期させるので、次の近世における転換の用例に繋がるものと考えられる。近世に入ると、文頭において、Nに指示代名詞コレが入る例が観察される。コ系列指示詞のコレは、前段の内容を統括する機能を持つ指示語である。そのため段落や当該場面全体を指示し、転換を表せるようになると考えられる。

以上の形式的な変遷過程をおおむね時系列に沿って一般化すると、以下の通りである。

（三十四）①［…］、N1ハサテオキテ、N2ハ…（文中）
②［…］、N1ハサテオキツ。N2ハ…（文末対比）
③［N1…］。N1ハサテオキ、N2ハ…（文中対比）
④［［N1］…］。コレ（＝［N1］）ハサテオキ、N2ハ…（文頭対比1）
⑤［N1…］。コレ（＝［N1…］の事態）ハサテオキ、N2ハ…（文頭対比2）

すなわち、①・②は、〈そのままの状態にしておく〉という意味をもつ段階である。特に②は、一旦、サテオキツ等の文末での使用によって、そこで話題が終止することを表す段階である。ここでは同一場面における対比関係が認められる。③は、N1が文頭に現れるが、②と同様に対比関係をとるものである。④は、コレハサテオキという形式であるが、コレは具体的な事物を指示する段階である。⑤は、コレが直前の事態を指示し、話を転換する段階である。

なお、コレハサテオキは、段の始まりや、時間・場所・登場人物等複数の変化や、語り手の草子地が語られた直後に用いられる等、出現状況に制限が見られた。その意味で、サテよりも大きな〈場面〉転換の際に用いられると考えられる。

以上、転換の接続表現Nハサテオキの成立には、次の要素が関わっていると考えられる。

（三十五）Ⅰ対比関係
Ⅱアスペクト形式を伴う文末
Ⅲ近称コレによる前段の統括機能

八　おわりに

本稿では、Nハサテオキの成立過程を検討し、近世期には、転換の例と考えてよい例が確認できることを指摘した。そして、その成立過程を考えるにあたり、対比関係を取る例や、アスペクト形式を伴い文末で用いられ話題を区切る例、近称コレとの共起例が、転換の接続表現化において、注意すべき観点であることを述べた。

注

（1）検討するというのは、得られた用例数が少なかったために、量的

な観点からの考察が不十分であるからである。

（2）近世後期以降は、今後の課題とする。

（3）ただし、現代ではソレハサテオキとソ系指示詞を用いるところがコ系（列）指示詞が現れている点、注意が必要である。本稿では十分考察できていないため、今後の課題とする。

（4）新編日本古典文学全集の頭注には「もちろんのことだが。「さて措く」はそのままで別にしておく意。」（一九二頁）とある。

参考文献

石黒圭（二〇一六）『書きたいことがすらすら書ける！「接続詞」の技術』実務教育出版

市川孝（一九七八）『国語教師のための文章論概説』教育出版

岡﨑友子（二〇一一）「指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ・サテ」を中心に―」青木博史［編］『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版

小池清治（二〇〇二）「除外表現」小池［他］［編］『日本語表現・文型事典』朝倉書店

小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也［編］（二〇〇二）『日本語表現・文型事典』朝倉書店

鈴木一彦・林巨樹［編］（一九八四）『研究資料日本文法④修飾句独立句編　副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院

田中章夫（一九八四）「4接続詞の諸問題―その成立と機能―」鈴木・林［編］『研究資料日本文法④修飾句独立句編　副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院

西田隆政（二〇〇一）「源氏物語における指示語「さて」の用法―平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって―」『国語語彙史の研究』二〇、和泉書院

百瀬みのり（二〇一九）「中古中世散文作品における『転換のサテ』について―接続詞の「サテ」に向かうものとしての―」『詞林』六五、大阪大学古代中世文学研究会

調査資料

後藤重郎［校注］（一九八二）『新潮日本古典集成第49回山家集』新潮社

横山重［校訂］（一九六八）『説經正本集』一～三、角川書店

国立国語研究所（二〇二一）『日本語歴史コーパス』（https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/、最終閲覧日：二〇二一年十月三〇日）

国立国語研究所（二〇二一）『現代書き言葉均衡コーパス』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search、最終閲覧日：二〇二一年十月三〇日）

Japanknowledge HP（https://japanknowledge.com/personal/、最終閲覧日：二〇二一年十月三〇日）

【付記】本稿は、JSPS若手研究20K13999の助成を受けている。

（きよた・あきひろ　大阪教育大学特任准教授）